

昔むかし、あるところに、ふたごの兄弟がいました。ふたりはたいそう仲良しでした。弟は体がとても小さくて、兄さんのふところに入ってしまうほどでした。でも、弟は、力は弱くても魔法を使うことができました。

ある晩のこと、兄さんはベッドに入り、弟は兄さんのまくらの上でに横になりました。兄さんが弟にいました。

「おい、聞いてくれ。ぼくは結婚したいんだよ。でも、どこに行ったらお嫁さんが見つかるかなあ」

弟は、

「兄さんが結婚するなら、ぼくも結婚したいな」といいました。

「よしわかった。でも、おまえと同じくらい小さなお嫁さんが、どこにいるだろうね」

「ぼくにまかせてよ」と、弟はいいました。

弟は、ひとかたまりの炭で平たい石の上に円をひとつ描きました。そして、兄さんに、その円に火をつけるようにいいました。火がつくと、弟は、円の中に薬草の種をなげ入れました。すると、ひとすじの煙が立ちのぼり、なかから、小さな娘があらわれました。娘はいいました。

「わたしに何かご用かしら」

「ぼくたち、お嫁さんを探しているんです。大きなお嫁さんと小さなお嫁さんをね」と、弟が答えると、娘はいいました。

「それなら、わたしたちがびったりだわ。わたしには、ふたごの大きな姉がいます。父も母も死んでしまつて、ふたりきりで暮らしているの。山をこえてわたしたちのところへいらつしやいな」

火が消えると、娘も消えました。

つぎの日、ふたりはしたくをととのえて、旅に出ました。兄さんは、弟をふところに入れて歩いて行きました。まる一日歩いて山につきました。日が暮れると、兄さんは、よさそうな場所を探して毛布を広げ、その上に弟をすわらせました。それから、薪を集め、火をおして晩飯のしたくにとりかかりました。

ふたりが火のそばにすわっていると、ひとりのおじいさんがやって来て、いいました。

「すまんが、ちょっと火にあたらせてもらえんかな。今夜は少し冷えるもんでな」

「かまいませんとも。さあ、こちらにすわってください。いっしょにご飯を食べましょう」と、弟がいました。おじいさんは、ふたごの兄弟のそばに腰をおろしました。

食事が終わると、おじいさんが、

「あんたがたは、どこからきてどこへ行きなされるのかな」とたずねました。兄さんは、

「ぼくたちは山を越えてお嫁さんを見つけに行くところなんです。大きな娘さんと小さな娘さんです」と答えました。すると、おじいさんはいいました。

「それなら、おまえさんたちに忠告しておかなくてはなるまい。そのふたりの娘さんなら、魔女が見張っていて、にげだせないんだ」

「じゃあ、ぼくたち、どうしたらいいんでしょう」と、弟がきました。

「よい行いは、かならず報われるもんだ。おまえさんたちは、ここでわしをあたたくもてなしてくれた。だから、明日おまえさんたちのために、わしが魔女を始末してあげよう」と、おじいさんはいいました。

つぎの日、三人は出かけました。

日暮れ近くなつて、ふたりの娘の住んでいる村にやって来ました。娘たちはよろこんで三人を迎え、村の人たちもあたたかく迎えてくれました。そして、さっそく結婚式をあげるようになりました。ところが、みんながお祝いのテーブルについたとたん、いならずまが走り、雷が鳴り始めました。そして、部屋の戸が勢いよく開いて、魔女が飛びこんできました。

「これは、これは。あたしをさしおいて、結婚式をやろうっていうのかい」

おじいさんは、

「あんたをさしおいてるわけじゃないよ。きょうは、あんたも結婚式をあげるんだ」といいました。

「へえ、そうかい。それじゃ、あたしの花婿はどこにいるんだい」

「おまえさんの目の前に立っているじゃないか」

おじいさんはそういうと、棒で魔女をなぐり始めました。

「やめてくれ！やめてくれ！」

魔女はさげびましたが、おじいさんは、魔女の皮がすっかりはがれるまでなぐりつづけました。すると、とつぜん、そこに、ひとりの美しい娘が立っていました。娘は、おじ

いさんの手から棒をとると、

「あなたにも同じようにさせていただくわ」といって、その棒でおいさんをさわりました。たちまちおいさんは、美しい若者になりました。

そういうわけで、つぎの日は、三組の結婚式が行われました。大きい兄さんと大きい姉さん、小さい弟と小さい妹、そして、おいさんだった若者^{わかもの}と魔女だった娘の結婚式です。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話 31 カリブ海』瀬戸武彦・伊藤富雄・持尾伸二訳／ぎょうせい